

市港の地位を奪っていった。こうして四日市が、すべての面で、名古屋に一步譲ることになった経過を述べた。

第二章では以上のように、四日市港を行政単位 of 四日市市と結びつけたので、もっと広い視野に立って四日市港の機能を探る必要性を感じ、第三章では「四日市港とヒンターランド」の結び付きを工業に焦点を当てて追求してみた。そしてそれが単なる港湾の研究に終わることがないように四日市市の繊維工業とも関係があり、かつ四日市港の代表的な輸入品でもある羊毛と綿花に、そして片貿易是正のための輸出貨物集貨対策と関係のある陶磁器に注目して論を進めた。

都市化に伴う世田谷区の農業の変容

奥 田 留 美 子

世田谷区は東京都の中において、政治・経済・商業の中心的地区の周辺住宅地として安定した状態にあり、かつての「近郊」ということばは完全にあてはまらなくなっている。そして、現在市街地化の進行している東部区部や西方の市部と異なり、市街地化の一段落した本区では、農業すなわちその基盤となる農地の、住宅地供給の役割は終って、「緑地」という都市の中の分化された一つの役割を持つようになっている。

一方、生業としての農業の面から見ると、耕地率は低いが都内において出荷量を誇る作物もあり、また特定の作物に専門化した専業農家も多く、全く農業的に成立する要素が消え去ったとは言えない。本区の農業は、地形、気候、土壌、その他の有利性を条件として行なわれているものではない。農作物としては いたみやすい軟弱野菜、花卉園芸を中心としてはいるが、それは価格が高いためである。野菜作において 経営耕地の小規模な所では自家消費用が多く、大規模の所は出荷を中心として農業を行なっているが、いずれも不動産兼業による収入を中心とする農外収入が、全収入の何割かを占める。農外収入の方が多い農家は、結局農業は二義的になり、作物は踏て作りのになり、最終的には離農する傾向があるようである。

さて次に、本区農業全体の、現在そして将来の方向について述べる。本区の農業は、東京の近郊農村地帯としての位置を保っていた時期から今日までの都市化の進行の過程で、農業衰退の方向をたどるものと、住宅地化に付随した変化をしてきたものの2つの流れに別れて進行してきた。そし

て後者においては、ここ4～5年、新しい市街地農業の成立の方向に向かっているとされる。この新しい市街地農業とは、都市田によって消滅するような農業ではなく、逆に都市に包含されていることを利用でき、経営として安定性と発展性を持ち、同時に都市と共存し、都市に貢献するものである。すなわち、

1. 都市に対して緑と自然、そして空間を供給する農業
2. 都市の要求する超新鮮性、価格低廉の農作物を提供する農業
3. 趣味、娯楽に対するサービスを提供する農業

の3点において、存在しえるものである。

農業委員会の砧地区における将来構想によれば、砧地区の残存農地を保全し、一大公園化をはかり、レジャー農園、貸農園、レストラン、釣堀などをセットとして設置し、農協は園芸センターを整備し、直売を行ない、地区の中核となることをめざしている。

秦野盆地における

土地利用変化の地理学的考察

黒 沢 章 子

本論文は、神奈川県中西部に位置する秦野盆地を調査地域とし、従来よりたばこ産地として知られてきた当地域における近年の土地利用変化の考察を主な目的とした。

秦野盆地においては、自然に制約された土地利用が、種々の人文現象により変化していく形態は人口の急増・工業化の始まった、1960年を境として大きく変化していく。

1960～70年の秦野市における経営耕地の増減は、水田 -13.7%、畑 -30.2%、樹園地 +250.0%であった。ところで、秦野盆地においては、経営耕地の80%以上が、台地及び段丘面・山地及び丘陵地の緩斜面・谷底とその周辺に広がる畑であり、経営耕地の変化は、畑の変化を中心として考えられる。畑における農作物の作付は、1960年以降、全て減少しており、その中でもかつて秦野盆地における輪作体系の中心であったたばこ・陸稻の減少率は大きい。そして、夏畑作物で相対的に占有率が上昇しているのは、粗放栽培が可能ならっかせいのみである。樹園地は増加し、収益性の高い果樹は今後の増加も見込まれているが、秦野市の農業に占める位置は、ま